

「図会もの」について

横山邦治

はじめに

山東京伝の「忠臣水滸伝」前篇五・寛政十一年刊・後篇五・享和元年刊の成功が転機となり、説本の主流が上方から江戸の地に移行しはじめた事、その顛勢を挽回しようとした上方出版業界が、実録体説本の出版をはじめとするさまざまな對抗策を講じた事はよく知られている。^{註I}

ところでそれらの對抗策の一つとして採りあげられたと思われるのが、^{註II}図会もの^{註III}の出版である。そしてこの^{註IV}図会もの^{註V}は、幕末の江戸の説本凋落期にも、上方説本作者の手によって再び陽の目を見ている。

以下この^{註VI}図会もの^{註VII}について考察を進めようと思う。

江戸末期に盛行した名所図会の嚆矢である「郡名所図会」全六巻が、京都の書肆吉野屋為八から上梓されたのは、安永九年仲秋の事である。この書物の成立事情について、「西沢伝奇作書殘編中の^{註I}巻」に、^{註II}秋里離島翁の話^{註III}として、次のような記事が見られ

る。

○秋里離島は五条橋下融の大臣が飄飄の舊跡離島に住居せしゆえしか呼ぶとぞ。——中略——天明中貧窮の内に入と郡名所図会六巻を撰出して竹原春朝齋に画を乞ひしに春朝下画をかきて與えり。離島林何某へ持てちりばめ出版させんと勸るに書林是をよろこばず原より山城名跡誌京羽二重同織留京の水貝原氏の都廻り等有て山水美景は朝夕に見て飽たれば此書出版するとも行なはれまじと彫刻す心なかりしを離島の曰足下こそ洛陽長安に住み寺院社祠名所の奇観は珍らしからねど遠国他邦の人此書を見ば愛で求る者多かるべしと一派の宗門を弘る如く達て發行を勸るに書林も汝々受引て篋工彫刻にかよりけり。画は春朝に浄書させ離島は校合にがより作料漸式参田金也。長く著述に苦心をして教多の書籍を引寄せし甲斐もなけねど此書世上に弘まりなば望は足りぬと思ひ拍しに全部六巻出版して売る事夥しく僅の内に数千部摺出し書林は暫しに大利を得たり。

これによって秋里離島の苦心の末になった企画が、当時の人々に好評をもって迎えられたことが判る。この好評の原因は、「伝奇作書」の中にもその一斑が説かれているように、^{註I}文談は富貴権勢

山城名所紀行を種とし、とその撰る所を示しているとはいへ、広い知識にまかせた博引傍証ぶり、一もつともその引用の和歌や古典の文には不正確なものが多くようである。しかも奥地踏査の結果によつて平易に説かれた名所の説明ぶりにあつたのもあるが、それにも増して、今時の風景をありのままに模写し日本花洛細見図を増益し、たとい、竹原春朝齋の筆になる挿絵によつて、居ながらに名所に遊覧するの感を抱かせたのが、これを手にする人々を魅了したに違ひなかつた。〓図会〓、といふ名称にも明らかによつて、この挿絵を重視する結果は、挿絵をより効果的にするために、縦二十五・五種、横十八種という大本の体裁を採用せしめてゐる。

大本で数多くの挿絵を持っているという外見上の特長を有するこの「都名所図会」の盛行は、天明七年六月に拾遺五巻を上梓せしめ、更に多くの名所図会出版への導火線となつてゐる。この間の事情を「伝奇作書」の記事は次のように伝えている。

○其上此平安城に名所舊跡いと多し。是に漏れたるを拾ふて出せよと買手の方より催促によりこたびは薩島に詭らへければ秋里も面目にて作料何程と極し上引書のみきは書林より運びだしなき書物は穿鑿しても薩島に渡せり。都の拾遺成ると早次は大和より五畿内を擁へ六十余部も膨んと云。薩島は余事を打捨て画工竹原と筆者をつれ筆墨紙と眼鏡を数葉僕に持たせ着類調度を荷はせる剛力諸共以上五人けふ旅立一中略一行先々にも都名所の噂高く埋れし舊地の世に出る事故大地の寺院は坊に宿り大社は社司を宿として縁起宝物は文庫をひらいて取出して見え寺社のひらけし年号はもとより社務開基の伝来まで残る方なく寫す一中略一時には一度

帰国し引書をあさりて成就すれば河内和泉津の國と経歴草稿成れば浄書にかゝり彫刻成れば校合し五畿内都合四十巻此余伊勢參宮東海道岐蘇街道郡林泉等の数編を著し其間々に法橋中和に画を畫せ源平盛衰記保元平治前太平記年代記年中行事まで画抄を著し生涯安楽に過られしとぞ 一後略一

ここに見られるように、薩島は名所図会の成功に乗じて色んな方面に手をのばしているが、古典の図会化も計画実行したのである。数多くの挿絵によつて人々に親近感を抱かせるという効果のある図会化を、古典に適用しようとする場合、躍動的な合戦場面などで挿絵の効果を倍加せしめる軍記物語類が採りあげられているのは当然と言えた。そして、この図会化された軍記物語は、漆山天童編の説本年表に採りあげられて以来、説本の一類として著録されるに至つてゐるのである。

二

「源平盛衰記図会」六巻・寛政十二年刊・法橋中和画に始まつた薩島の戦記物語の図会化は、「保元平治闘図会」十巻・法橋中和画・享和元年刊、「前太平記図会」六巻・法橋中和画・享和二年刊と進められているが、まず「保元平治闘図会」を採りあげて、薩島の戦記物語の図会化がどんなものであつたか見てみる。

「保元平治闘図会」は、大本十巻十冊、各冊二十五丁前後の大部のものであるが、内容は題名で一目瞭然であるように、戦記物語の初作とされている「保元物語」と「平治物語」とを採り扱かつてゐる。

離島の意図した所は自序の終りに

○やつがれ櫻に源平盛衰記図会あらハしぬればこれは平氏懺んの時より書きはしめて世になりいつるさまなしこたひこの草紙は源平盛衰のもとより輯録し侍るなりかちおとのつはら／＼ならぬハ筆のおとれるからと見ゆるし給へかし

とあるので判明するのであるが、しかも完全な敷き写しと言える程度のものである。所々文章の異なっている点もあるが、極く一部分で言うに足りない。強いてあげると、説本によく見られる、各草の冒頭における修飾文の添加である。しかも全体に見られるのではない、思い出したように所々発見される。例えば、巻之三「為義降参移ニ義朝館」の冒頭に、

○何とかハ頼み頼ますめのまへに有も空しきかげろふの世をと安嘉門院四条の詠玉ひしも思ひ出され六条判官ならびに子供尋進らすべきよし播磨守に仰付らる。

(保元平治闘図会巻之三)

○さる程に六条判官並に子供尋ね進らすべき由、播磨守に仰せ附けらる。

(保元物語・巻之二)

とあるようなものであつて、その傾向もほかかがわれるであらう。

ただこの書物は、「保元物語」と「平治物語」とを一つものとして扱かっているので、「平治物語」の冒頭に見られる、史実に関係のない修飾的文章が全て削除されており、

○爰に近來權中納言兼中宮大夫右衛門督藤原朝臣信頼卿といふ人ありき

と、ただちに事件の内容に筆を進めている。二つの戦記物語をつな

ぎ合せた跡を見せまいとする配慮のあらわれであらう。

要するにどの点から見ても創作力の認められないものであつて、ただ二、三丁おきに見られる精緻な挿絵とその説明とで通俗化したという点で従来のものと異つてにすぎなかつた。そしてその点でのみこの書物の意義があり、当時の人々に迎えられたのであらう。

「源平盛衰記図会」も題名で判明するように「源平盛衰記」の図会化であり、「前太平記図会」も平将門叛乱以後保元の乱までの源氏一族興起のさまを描いた俗書「前太平記」の図会化であつた。

この二書は、「源平盛衰記図会」の序文に、

○一略一蓋其為製也。就原書ニ。撰括文詞。丹青事迹。芝繁剔冗。贅為六卷。其工亦勤矣。是編一出。則俾婦人児嬰亦易誦卒。一略一

とあり、又「前太平記図会」の自序に、

○一略一此文こちたくよみがたきことはもなしをち／＼を立てもとの文の山鳥の尾の長／＼しきをばふきて書るのみ也一略一

とあるのでも推察されるように、本文は一種のダイジェスト版であつた。殊に「源平盛衰記図会」にはその傾向が強く、原書に多い漢楚の故事を始めとして、各種の挿話が削除されており、「前太平記図会」でも随所で削除の手を加えている。原書が大部のもので、大冊とは言え六巻の本にする場合、当然考えられる処置であつた。

しかしその削除の部分に、辻褄を合せるため手を加えている外は、全く原文の敷き写しであつて、挿絵を加えて通俗化しただけのものという点、全く「保元平治闘図会」と同種のものと言えた。

このように相当大部の書物が、寛政末年から享和にかけて上方の出版業者の手によって出版されたのには、それ相應の理由があつたと思われる。その当時の上方出版業界は、京伝の「忠臣水滸伝」

の好評を契機とした江戸の出版業者の進出攻勢に遇つて、その対策に悩んでいる状態であつた。しかも当時ほとんど無名の新人であつた馬琴の、説本の処女作とも言える「復讐小説月氷奇縁」五・享和三年刊（大阪の書肆河内屋太助から板行）を出版しなければならなかつた程、作者不足をかこつていた上方の出版業者が、名所図会註の好評に便乗して戦記物語の図会化に乗り出し、江戸の説本への對抗策の一つにしたといふことは、当然考えられることであつた。薩島はその出版業者のすすめにまかせ、名所図会を著す片手間仕事として、法橋中和とタイアップした上述の書物を作りあげたのであろう。

このように考えると、この戦記物語の図会化という現象は、上方において速水春曉齋などの史録体説本が、江戸の説本への對抗策として盛んに売り出されているのと軌を一にするものと考えられる。とすれば説本と呼ぶにはあまりに創作性の欠除しているこれらの書物を、説本の年表の中に著録するのも、あながち無謀な処置とは言えないように思われるのである。

いずれにしても説本という文学領域における文学的価値はほとんど零に等しいと言えるが、その大本で挿絵の多い、しかも安易な内容許している薩島の諸作は、幕末期に頻出する図会ものとも呼べる一群の作品の先蹤としての役割を充分果しており、その文学的価値はいさしらず、説本史上の現象的価値を重視すべき作品だとすれば、その点で薩島は名所図会のみでなく、説本史の上でも一つの先駆者としての地位を認められるであらう。

以下「〇〇図会」もしくは「〇〇図会」の題名を有する説本の一群を、便宜上図会ものと呼ぶこととする。

薩島によつて口火を切られた図会ものは、化政年間の説本最盛期にはあまり見ることができない。わずかに「聖徳太子伝図会」大本・六卷六冊・法橋中和画・享和四年（文化元年）臨派道人序・（跋文の署名によると、著者は「わかはやしのくすみつ」とあるが、伝未詳）「七福七難図会」半紙本・五卷五冊・生々瑞馬著・岡田東扇画・文化五年刊（これは人間の七福七難について意見を述べた隨筆といった方が判りのいいものである。）を見るにすぎない。いずれも上方の出版である。

「聖徳太子伝図会」は、聖徳太子の一代記で、序文にその述意がくわしい。

○夫世に行はる。聖徳太子の伝といへる書。はた鮮しとせず。しかはあれと。おほむね。此に精しきては。彼に粗くはたかしこに闕ぬるハ。此に載て。いまたまたく備はると云ひかたくやありんか。一オ されは今爰に著ハせるは。これかれをましへかうかえもて。國つ文字とはた其おもむきを。画にうつしもハラ。竝裝までも。見しりやすからむために。かくものするにこそ。こやおのつから。善を^{一ウ}勧め。悪を^{一ウ}懲すの。補にもなるらめと。撰者の心はえ。いとみじくはへれ。云々

これによると図会ものの持つ特長の外に、説本の一般理念である勧善懲悪の微意も含ませているかのような言も見られるが、内容はそれほど意識はあまり認められないように思われる。

その執筆態度を見みると、善之一では、最初に「三都三霊場事略」があつて四天王寺・広隆寺の由来について述べ、続いて「太子

造立精舎通略」に聖徳太子の造立した寺院について説き、最後に「編」集太子伝「大略之事」とあって、この伝記を著すについての方針や原拠について述べている。それによると、太子の三巻の伝、四巻の伝、十巻の伝といふものを挙げながら、特に「聖徳太子伝暦」を指摘・解説している点から、太子の伝記的記述では、この「聖徳太子伝暦」を中心として、「権事本紀」を参照し、更に「日本書紀」などの史書を活用したらしいことが判る。本文に入ってみると、「元享釈書」「新撰姓氏録」などという書物をも採用している事も明らかになる。

卷之二から本題に入つて、「聖徳太子伝暦」と酷似していることは、その文章を比較すれば明らかである。今、太子誕生の前後について述べた箇所を例にあげてみよう。

○卅二年^{辛卯}春正月朔^{甲子}夜妃

夢有金色僧容儀太艶。

对己而立。謂之日。吾有

救世之願。願暫留后腹。

——中略——自此以後。始

知有娠。妃之妊也。性殊

容敏。動止閑爽。機穢弁

悟。經于八月。言聞于

外。皇子并妃竝以太奇。

○欽明天皇卅二年辛卯の歲正月朔日の

夜穴鞠部間人の妃。ふしきの^益夢を

蒙り玉ひぬ。其夢は金人身に光あ

り。忽然として御枕の辺に來り宜ひ

けるハ。我に世を救の大願あり。暫

く妃の腹に宿るべし。——中略——其後

果して唯ならぬ意地に覺玉ひ。懐胎

ましましけるこそ不思議なれ。是より

懐腹十二ヶ月の間。少しも苦しき

事なく。身心はなはだ閑爽にして。

何となく聰明なり給ひ。仮令ばいかな

る事を尋問奉るといへども。忽然

として其答をなし玉ふ事。水の卑に

流るゝが如し。人々奇異の思をなさずと云事なし。

このように諷訳とも言える程度のものであるが、「聖徳太子伝図会」では、続いて「斯る事。天竺震旦にも例あり。」として、舍利弗の生誕説話を同一例として引用する。又処々に「天山按ずるに」とか「元享釈書を按ずるに」とかいう書き出しの、註めいたものに相当のスペースが割かれている。

この註を附していく記述方式は、前期説本群の一つとして注目されている長編の仏教説話もの^註の一部、例えば「中将姫行状記」七・致敬編・享保十五年刊 などの記述方式に酷似している。仏教具の強い奇譚によつて潤色された「聖徳太子伝図会」なのであるから、近々二・三十年前に盛行した仏教説話ものの記述方式の影響を受けるとは当然と言えるが、その記述態度には相当の相異点が認められる。

仏教説話ものでは、歴史的なものに材を仰ぐ事は少く、童幼を教化するための方便として、淨瑠璃・歌舞伎などによつて民衆に親しまれていて興味ある説話を採りあげ、それに仏教的因果応報観を結びつけるために種々の趣向をこらしているのが普通である。当然歴史事実と捉われるというような事は認められないのであるが、「聖徳太子伝図会」では、あくまで歴史事実と忠実であろうと努めている。当時としては信用がおけたであろう太子の伝記「聖徳太子伝暦」を祖述しただけでなく、その中でも歴史的に不合理と認められる点は反駁して訂正を加えている。その著しい例としては「聖徳太子伝暦」にも「元享釈書」にも説かれている、聖徳太子が慧思禪師の再来だといふ説を駁して、妄説だとしているのがあげられる。妄説だとする根拠は、人間の再生がありえないからというのではなく、慧思禪師の生存中に聖徳太子が生れているという史実上の矛盾

を指摘する事によって妄説だとするのである。仏教説話ものに見る作者の態度とは全く違っていると云えるであろう。この態度から当然考えられることであるが、趣向を設けて因果応報、勧善懲惡の理念を導入しようとしている形跡は認められないのである。

なお「聖徳太子伝図会」が「聖徳太子伝曆」を祖述しているとは言っても、伝曆に見る、日時に捉われた年譜風な記述方式は踏襲しておらず、正統的な伝記といった記述方式をとって、大綱に変わりはないけれども、太子の些細な行動は省略されている点も見受けられる。

このように検討してみると、大本で挿絵が多いという、体裁上は全く離島の図会ものの模倣である「聖徳太子伝図会」は、その内容においても、先行文学作品の敷き写しであった離島の場合ほど安易なものとは言えないにしても、創作性の欠陥は覆うべくもなく、離島のものと同傾向を持つと言えるであろう。まして挿絵を画いた画家が、離島と協力した西村中和であつてみれば、両者が同一の根から生れたものであることは明らかだと思われる。

離島の図会ものによって、図会もの持つ傾向がうかがわれたのであるが、この「聖徳太子伝図会」によって一層その特質が明らかにされる。それは体裁上の特長の外に、史伝ものとも言える素材が採りあげられており、しかも程度の差こそあれ、先行の文学作品に大きくよりかかった安易なものであることであつた。

江戸の説本の出版攻勢への対抗策の一つだと考えられる、いい挿絵書きさえ居れば手軽に出来上る図会ものは、前述のように文化・文政年間にはあまり姿を見せない。その原因は、江戸においては趣向をこらした京伝・馬琴を中心とする本格的な説本が都下人士

の喝采をあびていて、そこに割り込む余地はなかったし、又上方においても、江戸の説本への最大の対抗策とされた連水春隣斎などの実録体説本がある程度の成功を収めており、しばらくすると栗杖亭鬼卯のような、江戸の説本に追いつこうと努力する説本作者も姿を見せはじめたりするので、安易に出来るのが特長とも言える図会ものは、当初ほどの必要性が感じられなくなったのであろう。特に本格的な説本のみでなく、実録体説本でも仇討ものが猖獗を極めていた文化年間には、史伝もの中心の図会ものが割り込む余地が一層少なかったと言えるようである。

四

化政年間にはほとんど姿を見せなかった図会ものも、文政の末年から再び姿を現わしはじめて、天保から嘉永・安政の幕末期には相当の数をみるようになる。この幕末期の図会ものには、「平家物語図会」前編六・文政十二年刊・後編六・嘉永二年刊・高井蘭山著・有坂階斎画 とか「頼光朝臣殿功図会」一〇・松享金水著・歌川貞秀画・嘉永五年刊 といったように、江戸の説本作者の手になったものも散見するのであるが、中心は矢張り上方のものであつた。

幕末期の図会ものも、体裁から言うと大本がほとんどであるが、見得た範囲では「和氣清麿 本朝錦繡談図会」五・東隠亭主人補編・梅川東拳画カ・安政六年刊 が半紙本であつた。挿絵も各冊二・三ヶ所しか見られず、一般の説本と同程度で図会ものとしては数少いと云うべきものである。しかし和氣清麿と弓削道鏡との対立という有名な史実を、年代にも充分注意をはらって述べながら、孝謙帝の好色

を明らかに述べたり、和氣広虫の貞節を強調したりして、やや俗説を探り入れたという内容を持つこの作品は、図会という題名をわざわざ付けられただけあって、東籬亭の今一つの図会もの「北条時頼記図会」石田半山画・嘉永元年刊 や他の図会ものと同じように、先行文学作品や歴史書の影響の極めて大きいものであった。その「総論」と題した序文に

○此物語に統日本後紀大日本史大系図元享積書本朝紹運録水かゝみ八幡宮本記其外くさゝの書をもて其起をかきたれば世に多かるかの小説稗史などゝひとつらならず正史ともいはいひなむものか見ん人此てはりをしらすていとたくみなき書さまにもそしり玉八んにハ此ぶみの本意にはあらさりけりと みやこの 東籬亭主人 かしこみ申

とあるのによつても、東籬亭の意図するところがうかがわれるであろう。そこには自分の創作力の乏しさを隠そうとする負けおしみが感じられるが、一般の読本類と同一視されることを嫌っており、むしろかみくだいた史書として見られることを望んでいるかのようである。このように「本朝錦繡談図会」は半紙本で挿絵が少いとは言え、内容的には、史伝もので先行作品の模倣度の濃いものであるという、図会ものの範疇を逸脱するものではなかったと言えるであろう。

大本という体裁においても、鶴島の図会ものの形式を踏襲した幕末期の図会ものは、どのようなものであったであろうか。まず「一休詣国物語図会」七・平田止水編・菱川清春画 天保七年刊 を探りあげてみる。この作品は題名通り一休和尚の逸話を集めたものである。一休和尚の逸話と言えば、「一休咄」四・寛文八年刊、「一休

関東咄」三・寛文十二年刊 などによつて世上に流布しているが、「一休詣国物語図会」は全くこれらの敷き写しである。序文からして「一休咄」の序文を模したことが明らかである。

○一略略—それ一休和尚は後小一〇それ一休和尚は後小松院の二の宮にたましませり世の人の耳に残れる御歌にも後の小松の二葉と詠し玉ふも有けるとかや誠にともかしかき人にてましくけるが、高き御位をもふみちらし、大裏を跳出て、十宗をたゞ一目ににらみつつけ一後略—

「一休咄」序

「一休詣国物語図会」序

又冒頭の地獄極楽の問答は、「一休関東咄」上巻第五話「一休甲斐の園にて地獄極楽問答の事」の条を適当に書き交えたものであつたし、第三話の一休の名前の意味についての問答にしても、「一休咄」巻之一第三話をそのままうつしたものであるという具合であるから、全体の傾向が推しはかれるであろう。ただ所々に小字で、一休和尚が竜川新右衛門に対して「善悪五戒の講釈」をするという形式の、無味乾燥な説教が挿入されている。しかし本文と有機的に結びついていないので、註という形もとっているとは言えず、頁数を増すための手段かと疑がわれるほどのものであつた。

ところで同じ一休和尚を扱ったものに、実録体讀本の作者速水春暉翁の著した絵本一休譚六・速水春暉齋画 文化九年刊（序は八年・是水叟菊苑）八後編「一休譚 絵本薄紫」六・是水叟菊苑 作・文化十三年刊Vがある。この速水春暉齋は

○一略—近事人情変異して専ら実録なるものを喜び所謂故事遺事に本て編する処の英繁等の冊子は之を荒唐妄誕に帰して兒女輩といへども玩ぶを屑とせず一略—(絵本書鏡談卷十一)

など言つて、実録体説本の優位性を誇称しながらも、実際には写本として流布していた実録を焼直して、自分の手になる挿絵を加えたにすぎない安易な作品を手がけていた作者であるが、その春晓齋の作品「絵本一休譚」も、一休和尚誕生から説き起した、一休和尚の一代記という形をとつた実録体説本である。

ここで春晓齋の「絵本一休譚」の執筆態度をうかがうと、和尚誕生にまつわる説話は、「東海一休和尚年譜」の記事を参照、敷衍していることが察せられ、そこには一応信用のおける年譜で一代記を組み立てようとする意識を見ることが出来る。又「一休咄」などの逸話をそのまま採用している所も、年代順に並べようとする注意を怠たっていない点にも、ある程度の編纂意識が見られる。もちろん実録体説本の常として、奔放な想像をめぐらしたようなものではなく、年譜などによって組み立てられた骨格に、「一休咄」などに見られる逸話を肉付けしただけのものでしかなかった。しかしこのような「絵本一休譚」に比べても、創作性や編纂意欲の欠除したものが、「一休諸国物語図会」であったのであり、その内容の安易さにおいても、名実ともに離島の図会ものを受けていると言えるであろう。そしてそこには文学として新しい展開は全く認められないと言わねばならないであろう。

しかし幕末期の図会ものには、このように程度の低いものは少く、前に見た「聖徳太子伝図会」以上の編纂意欲を持ったものが多いうようである。

「日本書紀」を参照しながら、日本武尊の川上葺師退治の話から神功皇后の三韓征伐の話まで淡々と述べた「神功三韓退治図絵」五・山月庵主人編述・葛飾殿斗圖・天保十三年刊、や、浮世草子「北条時頼記」十・岡本一抱子・元禄四年刊を平易に祖述した「北条時頼記図絵」十・池田東齋著・松川半山圖・嘉永元年刊、などは、先行の文学作品を焼直している点では何ら変りはないのであるが、決して敷き写しと言ふべきものではなかった。そこには図会ものという体裁・内容の規範の中にありながらも、いかほどかでも説本性を持たせようとする努力が感ぜられる。

この努力がもっともよくうかがわれる図会もの一つに、「大伴金道忠孝図会」前編五・嘉永二年刊、後編五・嘉永三年刊・山田意齋著・柳齋重春肖像・宮田南北圖画がある。作者山田意齋(梁山子・得齋齋、又は好華堂野亭などの号がある。)は、「絵本楠公記」初編一〇・享和元年刊八二編以下は速水春晓齋画作で文化六年全三十巻完結するなど、上方の実録体説本の作者として、早くから名前の見られる人である。

「日本書紀」卷二十六齋明紀に見られる百濟救援軍の派遣から筆を起して、壬申の乱を頂点にした史実を背景としたこの「大伴金道忠孝図会」は、ある程度忠実な「日本書紀」の祖述であったが、作者の主意はそこになかったように思われる。その題名からもうかがえるように、その主素材は、竹田出雲作の浄瑠璃「大内裏大友真鳥」享保十年九月十八日上演、によって評判を得、其碩・自笑運署の八文字屋本「大内裏大友真鳥」享保十二年刊、によって説物化もされている、悪逆な叛臣大友真鳥に対する忠孝節義の人大伴金道(浄瑠璃では高村兼道)の復讐物語であった。この主素材を生かす背

長に齊明紀以後、天武紀に至る「日本書紀」の記事が利用されていると言えようである。殊に後編卷之三以後における、壬申の乱以後の記述は史実から離れて、真鳥に対する金道の勇ましい仇討話が中心となっている。

「日本書紀」の祖述が露骨である、後編卷之二に至る部分においても、「源平盛衰記」卷十〇有王渡疎實鳥事の条に見える軽大臣が燈台鬼にされる説話が、そのまま前編卷之一に挿話的な採用をされていたり、又幸若舞曲「百合若大臣」以来多くの文学作品に採りあげられた、悪臣によって無人島に置き去りにされ、お家横領される強弓の百合若大臣の説話が、単純なお家騒動に還元されてではあるが、前編卷之二から卷之五にわたって大きな部分として組み込まれていたり、相当手の込んだ趣向をこらしたものであった。

又題名に「忠孝」という言葉をわざわざ使っている所からうかがえるように、説本につきものの勸懲徳悪・因果応報といった理念も、稀薄ではあるが流れており、そのようなことは全く無視していた薩島などの図会ものとは大きく違っている。

とは言っても、「日本書紀」の祖述が前半では露骨にすぎない点、「源平盛衰記」の説話がほとんどそのまま敷衍されて、焼直しであることがすぐ目につく点、又採用された各々の説話が融合して渾然たる統一体をなしているとはいえず、劇的盛り上がりがばらばらである点などからいえば、自家菜籠中の趣向を新しい構想のもとに展開させるだけの才能も意欲も認められないようである。

このように「大伴金道忠孝図会」は、説本最盛期をかざった馬琴などの説本に比べると見劣りするものであるが、今まで説いてきた図会ものの範疇からは脱して、本格的な説本の墨を摩そうとす

る作品と言えらるであらう。なお山田意齋の図会ものには「扶桑皇統紀図会」二〇、「釈尊御一代記図会」六（ともに嘉永年間刊か。

「釈尊御一代記図会」は小説替目年表に作者未詳とあるが、「大伴金道忠孝図会」の巻末広告に、浪花 山田意齋叟参考とあるの
で、意齋の關係した作品であることが判る。又その巻末広告文に、
「都て如来御一代の事を記し図を加はたる難有説本也」とあるのは注目される。）などがある。

薩島にはじまる図会ものが、一旦姿を消し、又幕末に至って上述のようにさまざまの価値を持つ作品を包含して、いかほどか説本としての向上の跡を見せながら、外観的にはほとんどそのままの姿で再び現われた原因はどこにあるのであろうか。言うまでもなく江戸における説本の衰退がその原因であった。

五

もともと与党的な説本作者であった滝沢馬琴にさえ、
○予寛政三年より戲墨を以て渡世に做す事こゝに五十三年也、然れ共御咎を蒙りし事なく、絶板せられし物なきは大幸といふべし、然るに今茲より新板の草紙類御改正、前条の如く（種彦の田舎源氏絶板の風聞を指す。）嚴重に被^レ仰出^レ候上は、恐れ慎て戲墨の筆を絶て余命を送る外なし

（著作堂雜記、天保十三年寅六月の条）

という、よく引用される嘆声を発せしめた徳川幕府崩壊の断末魔とも言える苛酷な天保の改革が断行された天保末年には、説本の世界でも未期的現象を見ることができらる。

後期読本の最高峯として万人に認められている。「南総里見八犬伝」を天保十二年に完成させて、その強靱な筆力を誇った馬琴も、失明という肉体的条件に、宿願を果したという安心感も加わってか、それ以後あまり活躍しなくなっているが、更に嘉永元年十一月六日、馬琴がその生涯を閉じてからの読本界は、その大黒柱を失なつたに等しかつた。^{（後）}「神稲水滸伝」百四十（初編「文政十一年刊」）一編「岳亭丘山作・三編「天保五年刊」）一二十八編「明治十三・四年刊」知足館松旭作）「大川仁政録」二十・松亭金水作（初編「安政元年刊」）一四編「安政四年刊」）など江戸の読本作者の手になる長編続きものの読本が数多く見られるが、それも情性的に書きつがれているのみで、文政末年からの読本界の沈滞はもはや覆うべくもなかつた。だからと言つて、出版業界が手をこまねいて傍観していたわけではなく、様々な手段を講じている。

まず「絵本西遊記」四〇（初・二編は口木山人訳・文化三年刊）であるが、三編からは岳亭丘山訳で、天保四年から天保六年まで、出版完結。一「絵本漢楚軍談」二〇（上編五・滝沢馬琴・文化元年刊）であるが、続編十六・曲亭馬琴・文政十二年刊、更に「^{（補正）}繪本漢楚軍談」二〇・鶴鶴貞高（鳥永春水の変名弘化元年刊）と再刻されている。（「絵本通俗三国志」七四・池田東籬亭（天保七年から天保十二年まで刊行完結。）「絵本呉越軍談」三〇・東籬亭主人・嘉永六年刊）という中国稗史の翻譯・翻案が、平易な文と豊富な挿絵に彩どられて出版されている。「絵本西遊記」のように、一時中断していたものが再び陽の目を見たものもあることに注目したい。

又「絵本漢楚軍談」が再刻されているように、文化年間の読本最盛期の作品が再板されはじめたのも、天保年間に入ってから多くな

っている。ことに「梅若丸一代記」と改題して天明八年再板された「都鳥斐恋笛」五・自其笑嶺・享保十九年刊）が、「梅花柳水」と改題され、「梅若丸一代記」より一層読本のよそおいをこらし、^{（柳水）}「柳水は故人栗枝亭鬼卵の著述にて云々」といういい加減な序を附して、三度陽の目を見たのも、天保十三年三月、江戸の書肆鶴屋喜右衛門、釜屋又兵衛の手によつてであつたことは、興味をひく現象である。

更に奥録体読本も頻出している。そしてこの幕末期の奥録体読本には、文化初年に盛行した仇討ものが凋落してくと、「南総里見八犬伝」に代表される長編の史伝ものが読本界の中心的地位を占めてくるが、その史伝ものの流行に刺激されてか、史伝ものの中の軍記ものとも言うべきものが多く見られる。「^{（為朝）}外伝琉球軍記」一〇・東西庵主人・石田玉山画・天保五年刊、「^{（為朝）}繪本豊臣琉球軍記」前編一〇・岡田玉山画作・天保七年刊・後編一〇・宮田南北作・松川半山画・萬延元年刊、「^{（為朝）}繪本朝鮮征伐記」前編一〇・歌川貞秀画・嘉永元年刊、後編一〇同画・安政元年刊）などがそれである。文化元年に絶板を申し渡された「繪本太閤記」「繪本拾遺信長記」が、安政六年再板が許され、売り出されているのも注目される。

このような諸現象は、本格的な読本の沈滞とともに起つたのであつて、その空隙をうずめようとする出版業界の努力の現れと見ることができよう。そしてその努力のめつとも大きな部分を占めるものと、凶会ものの再出現が挙げられるのである。この凶会ものは、たしかに本格的な読本に拮抗できるほどの文学的価値は持っていなかつたが、翻譯・再版・更に奥録体読本などに比べて、質的にも量的にも読本沈滞の空隙を埋める役目を充分果していると言えよう。

又これらの諸現象が、殊に史録体説本と図会ものが、多く上方の説
本作者の手を経ていることは興味ある事実である。文学の主導権を
江戸に奪われていた幕末期においても、上方の説本作者達は江戸の
説本凋落の間隙を埋めるだけの勢力は擁していたと言えるのであ
ろ。図会ものの出現に端的にうかがわれるように、それは二番煎じ
の非難をまぬがれえぬものではあったが。

註Ⅰ、この間の事情は、中村幸彦先生の「説本展回史の一齣」

(国語・国文第二十七卷十号)にくわしい。

註Ⅱ 西沢一鳳著、(浪華書肆正本屋利助)新群書類従第一演劇
所収。

註Ⅲ 新群書類従第七書目 所収。

註Ⅳ 続帝國文庫第拾篇 所収。この書物は、享保書籍目録に

「前太平記平仮名 藤本元撰」とある。

註Ⅴ 近古 近物之本江戸作者部類(文芸 温知叢書所収) 馬琴の項参照

註Ⅵ 註Ⅰと同じ。

註Ⅶ 仏教説話ものについては、中村幸彦先生の「説本発生に関
する諸問題」(国語・国文第十七卷第六号)などにくわ
しい。

— 広島大学大学院学生 —